



合同慰霊祭当日の靖國神社社頭



祭文奏上 島村宜伸会長



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第41号

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
公益財団法人

〒102-0073 千代田区九段北3-1-1
靖國神社遊就館内・地階

電話：03 (6380) 8943
FAX 03 (6380) 8952
http://ireikyoku.com
振替口座 00140-6-334930

編集人 圓藤春喜
発行人 岩田司朗
印刷所 エグ印刷株式会社

目次

平成29年度合同慰霊祭齋行	1
パレンバン空挺作戦と慰霊(その1)	5
硫黄島遺骨収容第4次派遣に参加して	8
ベトナム残留日本兵の戦い	10
JYMA日本青年遺骨収集団の活動	11
ミャンマー・東部ニューギニア派遣	13
事務局からの報告	

平成29年度合同慰霊祭齋行

平成29年7月8日(土) 正午より、

靖國神社において、当協議会及び当協議会参加慰霊諸団体の合同主催による「平成29年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」が、ご来賓、協議会参加慰霊諸団体代表、賛助会員等169名の参加を得て、厳粛かつ盛大に斎行された。本慰霊祭は、協議会設立の当初から、「慰霊団体協議会」の趣旨に鑑み、協議会に参加する慰霊諸団体全団体が等しく主催団体となり、合同して慰霊祭を実施する形を取っている。その意味で、当日の朝早くから、多くの参加団体の役員等が参集し、準備・受付・案内等の合同作業に、共に汗を流している姿は、当協議会存立の象徴的意味合

いとして誠に意義深いものがあつた。とりわけ例年同様、協議会参加の一団体であるJYMA日本青年遺骨収集団の若い男女学生連が大挙して応援に駆け付け、会場準備・案内・受付などに、元氣一杯、澁刺と活動し、なかでも参拝者一人一人への心をこめた応対の姿は、多くの人に感銘を与えた。この若者達が背負う次代の日本が明るいことを確信する。今夏は異常気象続きで、本慰霊祭当日も九州北部地域は数日來の記録的豪雨の真只中。日々伝えられる洪水・土砂災害の惨禍の報道を聞くにつけ心痛むものがあつた。しかしながら、被災者の方々には申し訳ないが、本慰霊祭当日の靖國社頭は稀に見る晴天に恵まれた。これも戦没者の御霊のご加護かと感謝しつつ、式典に臨んだ。

祭文

本日ここに平成二十九年大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭を挙げるに当たり、戦没者慰霊諸団体を代表して謹んで全戦没者の御霊に慰霊の言葉を捧げます。

過ぐる大東亜戦争においては、多くの皆様が祖国と同胞の安寧を願ひ、アジアの解放を実現すべく、北は酷寒不毛、南は酷暑瘴癘の地に赴き、勇戦敢闘し散華されました。その数二百三十数万柱に及びます。

家族を故郷に残し散って逝かれた皆様方のご無念と、後に残されたご遺族の悲痛に思いを致すとき、今なお万感胸に迫るものがあります。

今日の我が国民が享受する平和で豊かな生活と、アジアの諸民族の目覚ましい発展は、皆様方の献身が礎石となつて築かれたものであることを決して忘れることはできません。

しかしながら、平和と繁栄が続いた七十二年の長い歳月の経過の中で、いつしか国民の間に戦没者に対する感謝と慰霊の心が風化しつつあることが憂慮されます。

また、諸先輩が残された我が国の

伝統的美徳に無関心な世代が増えるにつれ、軽佻浮薄な風潮が蔓延し、人倫に悖る行為も多発するなど、国民道義の頹廃が懸念されます。

私も大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会は、戦没者慰霊諸団体と相携えて、戦没者慰霊事業の永続とそれを通じて国民道義の作興に寄与することを活動の目的としております。

今こそ、大東亜戦争の国難に、国を挙げて立ち向かわれた皆様方の勇氣と献身を改めて思い起こし、先人から託されたこの美しい国の立て直しに邁進すべく覚悟を新たにします。

我が国周辺を見渡せば、米国第一主義を掲げる米大統領の就任、中国の軍備増強を背景とした拡張主義の継続、北朝鮮の核・ミサイル開発への狂奔、韓国の親北政権の誕生等、混迷の度を深めています。

しかしながら、幸いにして国内では、政府の強いリーダーシップの下、日米安保体制の一層の強化とともに懸案であった憲法改正の動きが加速しつつあります。

また、未だ帰還を果たされていないご遺骨の帰還についても、これを

「国の責務」として推進する新たな体制ができました。当協議会もその一員として、お一人でも多くの方々に故郷に戻っていただけるよう全力を尽くします。

ここに戦没者慰霊諸団体の各位とともに霊前に額づき、在天の御霊の安らかならんことをお祈り申し上げますとともに、どうか私どもにもお一層のご加護とお導きを賜りますことを冀つて慰霊の言葉と致します。

平成二十九年七月八日

戦没者慰霊諸団体を代表して

公益財団法人
大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
会長 島村 宜伸

式典

式典は正12時に開始された。トランペットの伴奏（堀田和夫氏）により、全員起立して国歌を斉唱した後、神職による修祓の儀、献饌の儀、祝詞奏上と神儀が進められ、祝詞においては、夫々の団体の戦没者への思いを籠めて、協議会参加46団体の団体名が各々奏上された。

次いで、島村宜伸協議会会長が公益財団法人海原会以下の46慰霊団体を代表して、別掲のとおり祭文を奏上したが、その中で特に、先人から託されたわが国古来の伝統的美徳が薄れつつある最近の世相を憂い、戦没者慰霊事業



受付で活躍するJYMA学生

式典に臨む主催団体代表



の永続活動を通じて国民道義の作興に寄与せんとすの協議会設立の趣意を思い起こし、この美しい国の建て直しに

一意邁進する覚悟を戦没者の御霊の前にお誓い申し上げ、在天の御霊の一層の御加護とお導きを冀った。

設立に携わられた諸先輩の思いを改めて反芻し、協議会及び慰霊諸団体に託された使命の重大さに、身の引き締まる思いであった。

次いで奉納演奏に移り、世田谷コールーデ合唱団(指揮・大穂孝子氏)による「ふるさと」題が奉唱され、清々しい女性合唱団のハーモニーが、参列者の心に沁みわた。奉納演奏の後段は、参列者一同、戦没者に思いを馳せて、トランペットの伴奏で「同期の桜」



献歌 世田谷コールーデ合唱団

「海ゆかば」を合唱した。一同の大合唱の声は神苑に飀し、英霊もさぞかし共に声を合わせられたことと拝察する。終わって、参列者一同は、本殿に昇殿参拝し、各慰霊団体代表者の玉串奉奠に合わせて拝礼した後、「国の鎮め」のトランペット吹奏の中、しばしの黙

祷で戦没者奉慰の誠を捧げた。なお、この本慰霊祭に際し、靖國神社には出向けないが、在宅のまま靖國社に玉串料をお寄せいただいた、いわゆる「在宅参拝者」が、今年も国内外合わせ74名を数えた。慰霊祭において、

「祭文」と共に神前に奉納する「参拝者名簿」には、今年も、この在宅参拝者を含めた243名の名簿を、奉納申し上げたことを、ご報告申し上げます。

直会

式典を終えて、参列者一同、靖國會館に移動し、一階の会場「九段・玉垣・田安の間」において、13時30分から、ご来賓、参加各団体代表、賛助会員等126名が参集して直会が執り行われた。

直会はず、当協議会岩田司朗常務理事兼事務局長の開会の辞に始まり、同理事の司会によって進められた。



「海ゆかば」合唱



挨拶 島村宜伸会長



挨拶 坂明夫靖國神社権宮司

当協議会を代表して島村宜伸会長が挨拶に立ち、本日の合同慰霊式典が、滞りなく、厳粛かつ盛会裡に終了できたこと、齋行に当たり、参加各団体から受けた絶大なご支援・ご協力に厚く感謝の意を表するとともに、今後とも、戦没者慰霊顕彰事業の永続を図るため、一層のご支援を賜りたい旨の挨拶が述べられた。



献杯 堀江正夫東部ニューギニア戦友遺族会会長

靖國神社の祭事・催し、間もなく始まる今年のみたま祭りの準備状況等について報告があり、とりわけ靖國神社御創建百五十年記念事業の一環として進められている外苑整備に関して、戦争を知らない若い世代に対し、愛する国



献杯 寺島泰三英靈にこたえる会会長

の為、家族の為に尊い命を捧げられた戦没者の偉業並びにそれを崇敬奉賛する靖國神社の意義を普及啓蒙するための諸企画のご紹介され、引き続きのご支援・ご協力を賜りたい旨のご挨拶があった。



トランペット演奏 堀田和夫氏

次いで、ご来賓の靖國神社坂明夫権宮司から、日頃の靖國神社崇敬奉賛に各団体から寄せられている協力・支援に感謝の意が表されると共に、最近の団体各代表の紹介と、宇都隆史・佐藤正久・山谷えり子各参議院議員、水落敏栄日本遺族会会長からの慰霊電報の披露があった後、参列慰霊団体を代表して東部ニューギニア戦友遺族会会長堀江正夫氏が、102才とは思えない矍鑠たるお姿で登壇され、ご挨拶を兼ね献杯のご発声をされた。ご挨拶の中で、12年前に当協議会を立ち上げられた初代会長瀬島龍三氏、名誉総裁三笠宮崇仁親王殿下の戦没者を思う熱い思いに触れられ、私ども一同、そのご遺志を改めて思い起こし、戦没者慰霊事業の永続と今後の拡充に努力すべき旨の決意が表明された。

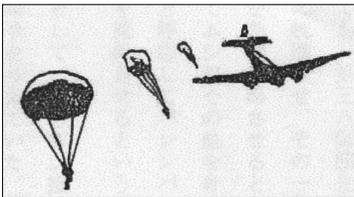
その後、和やかな雰囲気の下に懇談・会食は約1時間に及び、日頃、志を同じくしながらも話し合いをする機会の少ない慰霊諸団体同士がテーブルを同じくして、お互いの慰霊活動の有り様を伝え、苦勞の程を語り合つて、意義深い懇談のひと時を過した。最後は、堀田和夫氏のトランペット吹奏に合わせ、戦没者を偲び、全員で「海ゆかば」を声高らかに斉唱した後、英靈にこたえる会会長寺島泰三氏のご挨拶とご発声による献杯で、会は締めくくられ、司会者の閉会の辞と共に一同、名残を惜しみつつ解散した。

戦没者を偲び、戦没者慰霊に思いをたざらせる者同士、心行くまでの祈りと懇談のひと時に時の経つのも忘れ、参加者一同、胸の温まる思いの合同慰霊祭であつた。(稲木文夫記)

パレンバン空輸挺進作戦と慰霊

その1 作戦準備

和泉 洋一郎



英国が誇る東洋の牙城シンガポールが断末魔に苦しむ昭和17年2月14日朝、パレンバン上空に突如として純白の花模様が咲き乱れた。飛行場と製油所を確保す

べき任務を有する新編第1挺進団による陸軍初の空輸挺進（以下空挺と略す）作戦が敢行されたのである。優勢な蘭印軍を駆逐し、作戦は大成功を収めた。

本稿では、当初の作戦実施部隊が海没したにもかかわらず、急遽出動し、見事任務を達成した挺進第2連隊の敵中降下から製油所占領までの一騎当千の奮戦振りを取り上げる。

このパレンバン空挺作戦は、「東亜に於ける米國、英國及び蘭國の主要なる根拠を覆滅し南方の要域を占領確保する」ことを目的とする南方作戦の一作戦にすぎないが、昭和17年4月に発表された名曲「空の神兵」（作詞梅木

三郎、作曲高木東六）が国民的人気を博したこともあって、知らぬ人はいないほど有名な作戦となった。

一 パレンバン空挺作戦の準備の概要

1 空挺作戦の構想

わが陸海軍が、空挺作戦に着目し始めたのは、昭和15年の夏頃からであった。欧州戦場におけるドイツ空挺部隊の活躍に刺激されたこともあるが、実質的には、南方武力行使時つまりパレンバンにおける運用を考慮してのことであった。

そのため、陸軍では欧州駐在勤務を終えて帰国し、航空総監部部員となった井戸田勇中佐（陸士35期）が主務者となり、部隊の編成、要員教育を計画した。昭和15年10月、第1次要員約200名が全軍から選抜され、12月には静岡県三方力原に浜松陸軍飛行学校練習部が創設された。初代部長は河島慶吾中佐（33期）であった。

本来なら、ドイツ軍直々に伝授を受けたところではあったが、戦時下のドイツには、そんな余裕はない。見よう見まねの挑戦が始まる。それは、航空機の改造、落下傘の開発・改善、降下技法の開発、降下教育の改善、挺進隊独自の装備の開発など幅広いものだった。しかも、開戦の場合を考えれば時

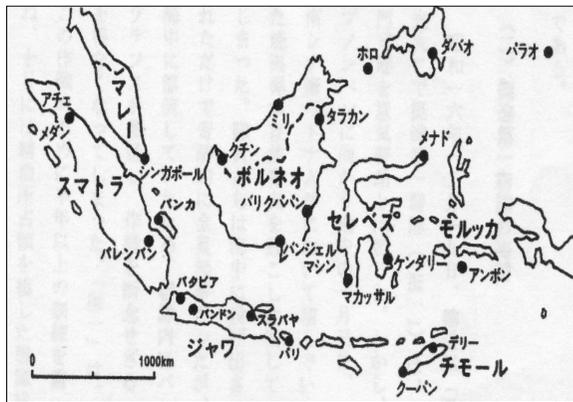
間は無い。涙ぐましい試行錯誤を経て、日本式挺進部隊を創り出したのだった。そして、昭和16年12月1日に第1挺進団（挺進団長久米精一大佐、挺進第1連隊長は武田丈夫少佐）を編成完結している。

海軍においても、昭和15年11月に研究（001号実験）に着手し、翌年5月には終了し、9月に横須賀鎮守府第1特別陸戦隊（司令堀内富秋海軍中佐）を編成完結している。そして、陸軍は、12月1日、海軍は11月末日に空挺作戦準備を完了した。それは開戦直前のことだった。

帝国陸軍の戦争目的は、南方の要域つまり南方資源を確保して絶対不敗の態勢を固めることにあったから、年間産出量370万トンを誇り、優良な製油所まで完備されたパレンバンは垂涎的であった。我が制すれば、わが国の年間の石油消費量を賄うことが出来るとともに、ジャワ島攻略が容易になるのであった。

しかしながら、パレンバンは、東西南北各3000〜4000kmに及ぶ広大な熱帯地方の奥深い位置にあり、一気に奪取できるものではなかった。したがって、その手順は、開戦とともにマレー方面に第25軍（当初第5師団、のち逐次近衛、第18、第56師団その順

に加入）を、次いで比島に第14軍（最初先遣隊、のち第48、第16師団各主力）を進攻させ、マレー、比島の攻略進展に伴い、これらを基盤として第16軍（第2師団、香港、マニラ攻略を終えた第38、第48師団）を蘭印に進出させて資源要域を占領するという遠大なものであった。この構想は概ね順調に進展し、蘭印攻略についても次のように進捗していた。



昭和16年
12月16日 ミリ上陸
12月20日 ダバオ上陸

12月24日 クチン上陸
 12月25日 ホロ島上陸
 昭和17年

1月11日 メナド、タラカン上陸
 1月24日 ケンダリー、バリックパ
 ン上陸

1月31日 パンジェルマシン、アン
 ボン上陸

2月9日 マカッサル上陸

次に控えるパレンバン攻略作戦につ
 いても、第38師団先遣隊を空海の掩護
 下に航進させ、その一部をもってバン
 カ島を急襲攻略させるとともに、主力
 をもってムシ河その他を舟艇で遡江し
 空挺部隊と呼応してパレンバンを攻略
 し石油資源を確保させるという構想で
 あった。

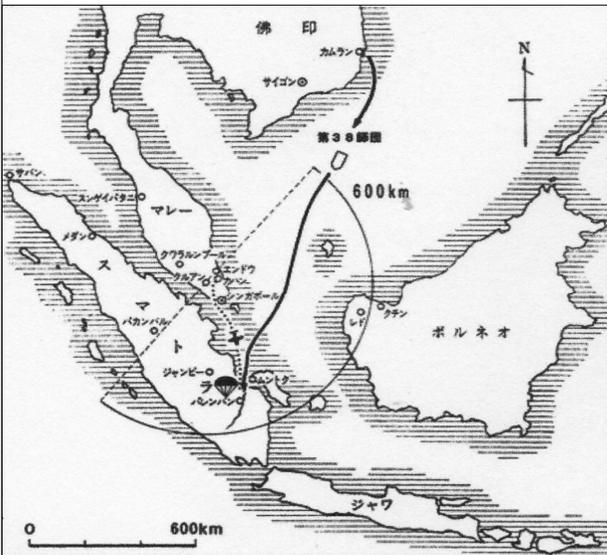
そして、南方軍は挺進部隊に次のよ
 うな命令を与えていた。「第1挺進団
 は、パレンバン飛行場を占領し、L
 (バンカ、パレンバン攻略) 及びH
 (蘭印攻略) 作戦を容易ならしむると
 共に為し得れば敵の破壊に先立ちパレ
 ンバン製油所を占領確保すること」
 開戦後、占領しつつあったマレー半島
 南部のクルアン、カハンからパレンバ
 ンに対する空挺降下作戦は、進攻距離
 約600kmで決して実行不可能な距離
 ではなかった。しかし、深刻な問題点
 が幾多もあった。まず、スマトラ方面

の敵航空部隊はハリケーン戦闘機等が
 増加され、相当優勢だと思われた。

次にパレンバン地区には蘭軍ヌーボ
 ル大佐を長として1000名以上の地
 上軍と多数の高射砲が配備されており、
 約300名程度の落下傘部隊では返り
 討ちに合ってしまう危惧があった。

さらに、飛行場と製油所という2カ所
 の重要攻撃目標が与えられ、いずれの
 確保を重視すべきかの難しい課題も残
 されていた。

このころ蘭印の現在機数は約500
 機、しかもの中にはB・17、B・24



というわが戦闘機では歯の立たぬ「空
 の要塞」数十機が含まれ、そのうえ、
 英軍機もなお百数十機はあると判断さ
 れ、敵航空勢力は我に優っていた。従っ
 て作戦目的の如何にかかわらず、まず
 パレンバン飛行場を占領し、敵空軍を
 制することが先決問題となったのであ
 る。

すなわち作戦の主目的は製油所の無
 疵占領・確保であるが、そのためには
 挺進団の飛行場占領によって敵機の活
 動を制し、第38師団の至難な上陸作戦
 を成功させることが先決である。たと
 え製油所を無疵占領して

も敵に爆撃され、あるいは
 は奪回され、または上陸
 が不成功に終わっては無
 疵確保はできない。した
 がって挺進団の作戦方針
 としては、飛行場占領を
 第一とし、なしうれば敵
 の破壊に先立ち製油所を
 占領確保すべきである。

第38師団の上陸日程も
 長い、製油所の破壊も
 短時日で徹底的に出来る
 ものではないから、最小
 限、飛行場占領に成功す
 れば、引き続き第38師
 団先遣隊が製油所を占領

し、次いで師団主力も到着してその占
 領確保を全うするという事になった
 のである。

こうして、事前に航空襲滅戦を行い、
 一時的な航空優勢下L日昼間に挺進団
 主力(約300名)を飛行場及び製油
 所に奇襲降下させ、敵が混乱している
 間に第38師団をムシ河から遡航させL
 +1日に降下部隊と連携させることに
 した。空挺部隊には、飛行場の確保を
 重視しつつ、製油所も無疵占領せよと
 の指示が出された。空挺部隊は、この
 難任務を背負って降下し、師団が到着
 するまでの1日半以上におわたって3倍
 強の敵と孤軍奮闘しなければならぬ
 ことになった。まさに映画「スリーハ
 ンドレッド」のようである。

さらに、降下部隊そのものにも予期
 しない災難が作戦直前に降りかかった
 のである。

2 挺進第1連隊の海難

昭和16年12月19日、輸送船「明光丸」
 で挺進第1連隊(「挺1」)は、門司
 港を意気軒昂と出航した。しかし、プ
 ノンペンに向かう途中の1月3日、南
 シナ海ベトナム沖において積んでいた
 焼夷弾が自然発火を起し沈没してし
 まった。隊員たちは海中に投げ出され
 ただけで奇跡的に全員無事だったが、
 海中に漂流していたため、連隊内にバ

ラチフスが蔓延し、作戦を断念せざるを得なくなってしまう。「挺1」はこの作戦のために半年以上の訓練を重ね、10月には製油所占領を模した連隊総合演習でその精鋭振りを陸軍首脳部に披露したばかりであった。

この報告を受けた南方総軍司令官寺内寿一元帥は衝撃を隠し得なかった。元帥は、本作戦での挺進部隊の活躍に大きな期待をかけていたから、訓練をつんだ「挺1」が使えない以上、挺進作戦は止めにし、地上部隊だけによるパレンバン攻略に変更しようと考えたとしても不思議ではなかった。

ところが、第1挺進団長久米精一大佐は諦めず、練成途中にある挺進第2連隊（以下「挺2」）をもって作戦の再興を図ろうと考えた。そして、「挺2」に急派を支配するとともに、1月8日空路日本を出発し、同日ブノンペン南方総軍司令部に乗り込んだ。

3 挺進第2連隊の作戦準備

甲村少佐は、明治37年京都生まれで陸軍士官学校38期である。満ノ国境の虎頭守備隊で歩兵中隊長を経験した。部隊勤務では沈着冷静、剛胆機敏で歩兵戦闘に造詣が深いと評されており、親分肌の強い軍人であった。

このような甲村少佐が、挺進第2連隊長を命じられたのは開戦後の昭和17



年1月5日のことであった。それは空挺作戦開始直前の人事であり、挺進第2連隊そのものもこの日編成されたばかりであった。

「挺2」は、歴戦の猛者たちをかき集めて昭和16年12月下旬に人員が揃ったばかりで、兵隊たちの平均降下回数は3回にすぎなかった。これは個々の降下がやつとで降下後の組織的戦闘が行える練度ではなかった。当時の降下技術では、自衛用の拳銃しか携行出来ず、地上戦闘を行うためには他の飛行機から投下される「物料箱」に格納してある小銃等を回収しなければならなかった。そのためには挺進1コ中隊（約90名）は、300m×700m地域内に集中して降下する練度が要求された。それは、物料箱も同一地域に重量投下されるからである。これらの訓練が未了だった。

「挺2」の門司出航は1月15日と決

まり、甲村連隊長は、装備品の調達に専念した。特に落下傘不足は致命的であった。落下傘無くしては神兵ではない。そこで藤倉航空工業に、性急かつ大量の発注がかけられた。数千名の工員や乙女らが動員され精魂込めて仕上げられ、辛くも出航に間に合った。これを聞いた隊員たちの感動もさることながら、作戦後にニュースを聞いた乙女達の感激は涙となって溢れ出たといわれている。

「挺2」は、2月3日ブノンペンに到着、ここで挺進作戦が再興されることを知り全員驚喜した。ジャワ攻略作戦の日程が遅れが生じたことで、作戦準備の余裕が生じ、「挺2」の練度向上が図れることになった。久米大佐らの粘り強い具申も功を奏し、寺内元帥も諒承、作戦は2月14日と決まった。

これ以降、甲村連隊長は、このわずかの期間と、限定された輸送機を利用して効率的な訓練と準備に挑んだ。分隊長以上には、高度3000mを保ちながら約1時間半、空中から視察して、地上要点の攻撃法を教育したり、南方特有の地形・地物に完熟させることにした。

また、日本から到着した新品の落下傘や装備品の点検整備を企図の秘匿に留意しつつ綿密に実施させた。

難航を極めたのが人選であった。輸送機数の都合上、第1陣には330名程度しか連れていけない。選に漏れた者は地団太踏んで悔しがったが、少佐は任務第一主義で厳として人選を断行した。



4 海軍独自によるメナドの攻略

メナドは、ケンダリーまで約600kmで、1000m×1000m規模の飛行場と水上基地を有し、我が制すればケンダリー、アンボンを攻略できる要地であった。陸軍の坂口支隊がタラカン島に上陸した日に、海軍は単独でメナドに上陸と空挺降下を行った。

佐世保鎮守府連合特別陸戦隊（佐連

特)の主力(約1800名)及びその一部(約1400名)は、1月1日早朝、メナドおよびケマに上陸、所在の敵を駆逐して、前進した。

一方、空挺降下を行ったのは横須賀第1特別陸戦隊(横1特)である。第1次降下の2コ中隊324名(揮官堀内豊秋中佐)は、0952、ランゴアンに降下し、ランゴアン飛行場とカカス水上基地を攻略した。12日には第2次降下の1コ中隊(74名)も戦闘加入した。

このように、わが国軍初めての落下傘降下作戦を行って偉功を樹てたわけであるが、パレンバンに対する空挺作戦を早くから計画していた陸軍は、海軍がメナドに対し同作戦を先行することに反対であった。陸軍側の見解としてはメナドは空挺作戦によらねばならぬような特別の意味があるところである、そのような場所に本作戦を実施して連合軍の警戒心を高めることは不適當と感じたのである。しかし海軍側はその延期に忠せず、結局メナド空挺作戦実施の発表を、パレンバン空挺作戦成功後に行うという奇妙な申し合わせで妥協させていた。(続く)

硫黄島遺骨收容

第4次派遣に参加して

偕行社会員 山下 輝男

(元陸上自衛官)

1 初めに

終戦から70年を経て尚、大東亜戦争の戦没者のうち113万柱が、南嶺に沈み、人跡未踏のジャングルに苔生し、酷寒の地に埋もれ、望郷の念絶ち難く、今猶彷徨っている。未だ帰還を果たせぬ数多の戦没者の御遺骨を收容・收容し、故郷・ご家族のもとに御帰還頂き、その霊を鎮魂し、安らかに眠って頂くのは国家の責務であり、齊しく国民の義務ですらある。

平成28年度から遺骨收容・帰還は国家の責務とされ、その意義ある初年度の「平成28年度硫黄島遺骨(第4回収容派遣)」に、「大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会(以下「全慰協」と云う。)の一員として参加する機会を与えられた。

折角の機会であるので、我が国の遺骨收容・帰還事業等を概観し、小生の体験記を紹介したい。

2 硫黄島における遺骨收容について

硫黄島における遺骨收容は、昭和27

年以降、今までに計128回にわたり行われ、戦没者21,900人中、帰還率は約49%である。(平成29年1月末日現在)

政府は、平成25年関係省庁会議を設置、更に平成28年には戦没者の遺骨收容の推進に関する法律が成立し、平成26年度から平成30年度まで外周道路側の面的調査を行うと共に滑走路の調査に基づく收容後、滑走路の移設に着手するとの方針の基に、10数回の開削調査と年4回の收容派遣を行っている。参考までに同じ日本国内である沖縄の遺骨收容状況は、戦没者総数188,100の内、未收容概数は740であり、如何に硫黄島の遺骨收容が遅れているか明らかである。

3 行動の概要

1月17日、入間市内のホテルに集合、結団式、翌18日空自の特別便で空自小牧経由硫黄島にフライト、天山戦没将兵慰霊碑において来島報告を行った。派遣団は総勢34名、遺族会、硫黄島協会及び旧島民の会からは各7名、全慰協等の諸団体から各2名の参加であり、派遣団長は推進協会幹部である。全慰協からは偕行会員である小生の他、水交会の会員のK氏であり、長期休暇を取得しての参加であった。宿舎は、



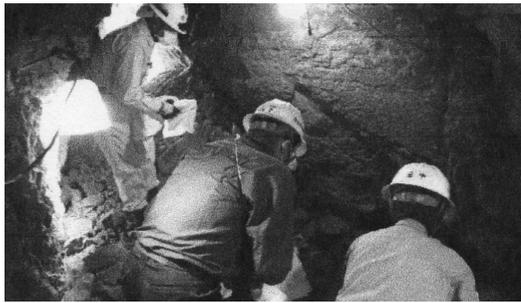
筆者の属したグループ 任務を終えて

米軍下士官用のBEOであり、食事は鹿島建設の食堂で喫した。

19日から、2ヶ所に分かれて收容活動を実施、午前中3時間、午後2時間の作業だが、午前の作業終了後にはシャワーを浴び着替え、午後も同じと、かなりなハードな作業であった。

日曜日は休養日であり、摺鉢山をはじめとする戦跡巡りを行った。

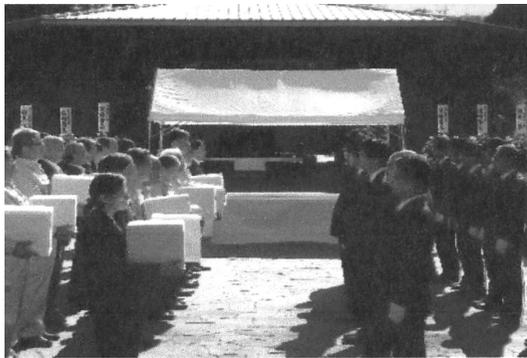
壕及びトーチカでの作業は、壕底が見えるまでの排土、遺骨の收容、排土を土砂と遺骨に選別、洗骨、仮安置への仮安置との手順である。作業の開始及び終了時には壕等に対し拝礼する



壕内の作業状況



壕外への排土 (バケツリレー方式)



遺骨引渡し式 (千鳥ヶ淵墓苑)

を例とする。

地熱の熱さは予想外で、小生の地下足袋ではじつとして居れない位だった。そのような過酷な環境下で戦わざるを得なかったかと暗然たる想いであった。

1月31日、現地追悼式を行い、2月1日、今回収容した4柱を含む今年度収容柱17柱を、遺族等が捧持して、硫黄島、入間基地での儀仗隊による捧げ銃、追悼の譜の下、見送りを受け、都内に帰還した。

2月2日には、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において厚労省への引渡を行って解団式となった。尚、厚労省では安置室に

安置するという。

解団式終了後、小生は靖國神社に赴き、英霊に対し、遺骨収集から無事に帰還した旨御報告をした。

4 「遺族の想い・心情に触れ！」

派遣団には、日本遺族会や硫黄島協会の関係者が多数参加されており、時折お話を伺う機会があった。その幾つかを紹介したい。

① 父親が硫黄島で戦死され、何回目の来島時に戦死した場所と思しき地点が特定でき、父親に会えたとの感を強くされた由。小さかりし頃は父無し子は矢張り駄目だと云われたくないと母親に厳しく躰けられたと云う。次回の慰霊祭には御息々2名を同行して色々説明する積もりと話された。

② 宿舎内団長室隣の部屋が仮安置所と指定され、今年度収容された13柱が安置されている。遺族会の方が朝夕に花と水を替えお参りしておられる。間もなく東京にお連れしますよと語りかけて居られるようで、その姿に感動を覚えた。

③ 父親の硫黄島からの手紙を持参しているの、今朝も正月分を読んできましたと話される方もあり、今日こそ良い報告が出来るようにと祈るような心持ちなのだろうと察せられる。

5 参加所見

多々あるが、3点のみ。他については、JPSNの記事を参照して頂きたい。

http://www.jpssn.org/report/iwo-to/
(1) 英霊の声なき声を聴き！

慰霊の島に身を置き、遺骨の収集・収容に係る作業を通じ、今なお眠る1万の英霊の声なき声に耳を傾け、切なる叫びを感じとろうとした半月であった。

日本国として、国民として、全ての御霊を本来居られるべきところにお返しすることが重要な責務であることを改めて痛感した。



宿舎の仮安置状況

国家が、最終的に責任をもって、御遺骨をご遺族のもとにお返しすることを保証し得ないようでは、国家たりえない。骨は必ず拾ってやると言って送り出した筈だ。その事をひしひしと感じて欲しいものだ。

(2) 抜本的な収集方策が必要では？

年に4回、1回の派遣団員数が30数名で、然も1回の収容数が10柱にも満たない状況で、設定された集中期間中に1万に近い遺骨収集が果たして可能か？何が問題なのか？その対策を速やかに講じるべきだ。

滑走路の移設方針は確定しているとしても具体策は未定である。早期決定と遺骨収集作業が必要であり、遅延は許されない。

硫黄島のみならず、海外での遺骨収集についても同様である。国内外の文献の徹底的調査は当然だが、現地住民からの聞き取り調査も必要だ。それらの諸情報をデータベース化して整理、分析して可能性のある地域を検討することが必要だ。その為には、現地に相応の拠点を設けることを考慮すべきではないか。現状のままでは戦後80年を目的に目途をつけるとの目標の達成は絶望的だ。

(3) 遺骨収集の重要性等を

更に広く国民に周知すべきでは？

慰霊の島、鎮魂の地である硫黄島。その硫黄島に今猶一万を超える英霊が懐かしの故郷への帰りを待ち侘びて居られる。そのお手伝いをすべく、今回のような収容団が編成されて御遺骨収集・収容を行っていることを国民の如何ほどが承知しているであろうか？厚労省のHPや各団体の機関誌やHPではそれなりに周知の努力が為されてはいるが、果たしてそれで十分に国民に浸透していると云えようか？

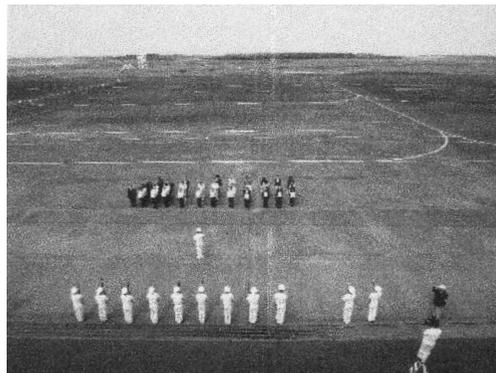
6 終わりに

未だ帰れぬ数多の英霊の眠れる鎮魂の島、その無念の島からの故郷への帰りを切望する魂を如何に早くご家族の下にお返しするか、与えられた枠の中で一生懸命に、一兵卒として老骨に鞭打って働くことがご遺族の想いに応えることであると信じての本事業参加であった。

遺骨収集事業の一端に触れ、ご遺族の心情等を肌で感じる事ができたのは有り難いことであった。本体験記が、後に続く諸氏の参考になれば望外の喜びである。また、ご遺族や関係者でない方も、挙って本事業に参加して頂きたいものである。

御遺骨の帰還なくして、戦後とは言

えない。戦没者の帰還を果たした時こそが、戦後の始まりであるべきだ。今日の日本の復興と平和は、戦没者のお陰であると銘肝し、一日も早い全御遺骨の収容・帰還を果たすことが国民の使命・義務であろう。



硫黄島での見送り

ベトナム残留日本兵の戦い

今年2月に天皇・皇后両陛下がベトナムを公式訪問された際、戦後もベトナムに留まり独立のために戦った残留日本兵のご遺族と面会し慰労された。ベトナムの独立戦争には約600名の元日本兵が参加したといわれているが、今回はこの戦いについて紹介したい。

戦後、フランスはベトナムの再植民地化を図るため軍隊を再進駐させるとともに、約8万人の残留日本兵とベトナム人の連携を恐れ、帰国を急がせた。一方、独立を指向するベトナム人は、1945年9月20日にベトナム民主共和国(通称北ベトナム)の樹立を宣言し、翌年5月にはベトナム独立同盟軍(通称ベトミン軍)を編成し抗仏戦争を開始したが、ベトミン軍には指導者と武器・弾薬が決定的に不足していたので、未だ帰国していない日本兵を味方にすべく手段を尽くして勧誘したという。

その結果、井川少佐以下約600名がベトミン軍に加わる事となった。これら将兵は、ベトミン軍が初めて設立した陸軍士官学校の教官としてベトミン軍将兵を鍛え、部隊精強化に寄与



元日本兵の御遺族を慰労される両陛下

ベトナムの抗仏戦争は、55年7月の後までは、残留日本兵の功績が正当に評価されることはなかったが、86年に「ドイ・モイ（刷新）」のスローガンの下、大胆に市場経済の導入や西側諸国との関係改善が図られるようになるのと並行して、残留日本兵の抗仏戦争への貢献を正当に評価しようとする動きが出て、2005年までに40人近い元日本兵が叙勲されているという。

今回の調査地はミャンマーの北西部に位置し、平均標高2000メートルに達するアラカン山脈を抱えるチン州というところである。この地はインパール作戦に投入された師団のうち左突進隊と呼称される第33師団（弓師団）の進軍路・撤退路である。このチン州の最北部チカ町において調査を行うのは戦後初のことである。またJYMAの学生としてミャンマーにて活動を行うのは今世紀に入ってから初めてのことである。

未だ現役の飯盒、街道脇に佇む戦車の残骸、そして調査地から発見される数多の遺留品。かつて我々の先輩方は確かにこの地におられたのである。そして先人たちが遺したるものは物質的なものだけでない。現地の方々の心にも先人たちの思いは遺されていたのである。それは現地の方の日本人に対する思いから感じることができた。

今回の調査では、現地の方の聞き取

すると共に、各部隊の参謀として作戦・戦闘指導に貢献したという。しかしながら、独立戦争の山場となった1953年5月のディエンビエンフーの戦いにベトナム軍が勝利する頃には、7年間に亘る実戦で鍛え抜かれたベトナム軍は元日本兵の助力を必要としないうちに充実してきた。

ベトナムは、56年の自由選挙で統一予定であったが、南ベトナム政府が選挙を拒否したため、南北に分断が固定化、64年からは南ベトナムを支援する米国と共産主義国に支援された北ベトナム・南ベトナム解放民族戦線（通称ベトコン）の間で約10年間に亘り泥沼の戦い（通称ベトナム戦争）が続いたが、73年にはパリ和平協定が締結され、米軍が撤退、75年には南ベトナム政府が打倒され統一ベトナムが誕生した。

去る1月23日から2月9日まで第3次ミャンマー調査派遣を行った。今回の調査地はミャンマーの北西部に位置し、平均標高2000メートルに達するアラカン山脈を抱えるチン州というところである。この地はインパール作戦に投入された師団のうち左突進隊と呼称される第33師団（弓師団）の進軍路・撤退路である。このチン州の最北部チカ町において調査を行うのは戦後初のことである。またJYMAの学生としてミャンマーにて活動を行うのは今世紀に入ってから初めてのことである。

そして今回の調査結果の可否によって収容の可否が決まるという事から、いつにも増して緊張感を持って調査に臨んだ。

今回の調査では、3カ所の野戦病院跡や、4カ所の陣地跡、その他多くのご遺骨に関する情報がある箇所を60カ所以上試掘し、有力な情報と合わせて、合計19カ所の地点で遺骨をお迎えした。



次の2篇は、国内外の戦没者遺骨収集で活躍している「NPO法人JYMA日本青年遺骨収集団」機関誌「遺烈」第203号に掲載されている感銘深い記事の一部を、ご了承を得て転載させていただいたものです。

第3次ミャンマー調査派遣報告

関口幹久（國學院大学2年）

去る1月23日から2月9日まで第3次ミャンマー調査派遣を行った。

今回の調査地はミャンマーの北西部に位置し、平均標高2000メートルに達するアラカン山脈を抱えるチン州というところである。

この地はインパール作戦に投入された師団のうち左突進隊と呼称される第33師団（弓師団）の進軍路・撤退路である。

このチン州の最北部チカ町において調査を行うのは戦後初のことである。

またJYMAの学生としてミャンマーにて活動を行うのは今世紀に入ってから初めてのことである。

そして今回の調査結果の可否によって収容の可否が決まるという事から、いつにも増して緊張感を持って調査に臨んだ。

今回の調査では、3カ所の野戦病院跡や、4カ所の陣地跡、その他多くのご遺骨に関する情報がある箇所を60カ所以上試掘し、有力な情報と合わせて、合計19カ所の地点で遺骨をお迎えした。

アラカン山脈の山々は想像していた姿よりも雄大で、そして恐ろしいものであった。左右を見渡せば、千古谷を入れぬ深い森、底が知れない千尋の谷、そして万古不偏を思わせるアラカンの山々・・・我々の先人たちがこの地を歩いたとは、到底思えない光景が広がっていた。しかし町や村でよく目を凝らしてみると、先人たちが遺したものが至る所に点在していた。

未だ現役の飯盒、街道脇に佇む戦車の残骸、そして調査地から発見される数多の遺留品。かつて我々の先輩方は確かにこの地におられたのである。そして先人たちが遺したるものは物質的なものだけでない。現地の方々の心にも先人たちの思いは遺されていたのである。それは現地の方の日本人に対する思いから感じることができた。

今回の調査では、現地の方の聞き取

調査も大事な任務であった。

その中で現在84歳(当時12歳)の古老の話を聞くことが出来た。古老は次のように我々に語ってくれた。

「日本の兵隊さんと暮らしたり、食事をしたり、隠れたりするのは楽しかった。日本の兵隊さんは本当に優しくかった。」私はこの言葉を聞いて思わず涙が出そうになった。また話を聞いていくとこの地に住む民族(ZOMI族)

はかつて日本兵と共に闘っていたという事実も分かった。このような経緯から彼らの多くは我々に対して好意的である。乾期の為、土が非常に硬く日本人の手ではどうしても掘り進めなかつた調査地点も、彼らの献身的な努力により調査を行うことが出来た。このように我々がチン州において友好的に活動できたのはまさしく先人方の努力の賜物である。

以上のようにかつて一つの目的の為に共に協力し合った人々の子孫が70有余年の時を越え、再び同じ地で同じ目的のもと活動ができるという事は非常に感慨深いものであり、また喜ばしいことである。

最後になるが私は今回の派遣で、調査の重要性和現地の方との交流の重要性を再認識することが出来た。当団は収容活動には多く携わってきたが、調

査というのは殆ど行っていない。当然のことながら、ご遺骨に関する情報を収集しなければ収容派遣は組めないものである。このことから私は、先人の帰還の正否は調査にありと強く確信した。

今後とも弛むことがない強い意志、先人に対する感謝の誠を持ち、すべての先人が内地の桜を仰ぎ見る事が出来るよう、粉骨砕身、努力したい。

東部ニューギニア派遣報告

柄沢健史(東京理科大学3年)

去る2月23日、東部ニューギニア戦没者遺骨収容派遣団が16日間の派遣日程を終え、帰国致しました。

今回の派遣に当団からは北村奈織香(立命館アジア太平洋大学2年) 柄沢健史(東京理科大学3年)の2名が参加致しました。

今派遣は、ポボンデッタで遺骨収容・焼骨を、ラエ・ウエワクで洗骨・焼骨を行いました。そして東部ニューギニア戦友・遺族会のご遺族の方々により五回行われた未送還遺骨情報収集事業で収容したご遺骨を含め112柱のご遺骨をお迎えし、千鳥ヶ淵戦没者墓苑にご捧持致しました。

3日間収容活動を行った、オロ州の

ポボンデッタから海側に1時間ほど車で移動したところにあるバコー集落では事前に住民の方がご遺骨が眠っているだろう場所に目星をつけており、家の軒下や、広場といった場所を主に搜索しました。住民の方に文房具を提示するなど友好親善にも務め、また一致団結、協力してスコップで掘り進めました。ご遺骨の搜索は難航しましたが、鉄帽を被ったまま土中で眠っていたご遺骨8柱を収容できました。

今回の派遣も、例年と同様に収容活動よりも洗骨、焼骨作業が主な活動でした。ご存知の方も多いと思いますが、洗骨は骨を洗うというように読みますが、水を使って行うことは通常ありません。ブラシで表面の砂や泥を落とし、ご遺骨の内部に詰まった土を削ぎ落とすなどして、綺麗な状態に戻します。頭骨の内部に土が詰まっています、もはや原型が分からない状態になっているご遺骨も、丁寧に汚れを落とすしていきます。

洗骨活動というのは膨大な数のご遺骨を目の前にし、黙々と行う一見地味な活動にみえます。しかし、これを怠ると焼骨の際に火が回らなかつたりし、日本に帰還する際の妨げになる為に重要な活動になります。土にまみれたご遺骨を見るたびに、戦後70余年の年月の長さを感じます。お骨

だけの姿になっても、せめてきれいな姿で日本にお戻りして頂きたいという思いで一つ一つ丁寧に泥を落とし、頂きました。暑く、ジメジメとしたニューギニアの高温多湿の過酷な環境の中で活動は、実際にこの地で亡くなった将兵のことを強く思い起させました。

帰国後の千鳥ヶ淵戦没者墓苑での引渡式では、あいにくの天気の中でしたが、多くのご遺族の方がご参列され、まだまだ戦没者の御帰りを待つておられる方が多くいらっしゃるのだと感じ、我々はそのようなご遺族の方の想いも一緒に背負って行っていたのだと改めて思った派遣でありました。

未だ充分な交通網も整備されてなく、そして広大な地域に、7万柱ものご遺骨が取り残されています。スコップで一掘り一掘り掘っている中で、全てのご遺骨をお迎え出来るにはあと何年かかるだろうかと考えたりもしましたが、一柱でも多くのご遺骨をお迎えするべく、今後も東部ニューギニアでの遺骨収容活動を当団は精一杯行っていきたいと思えます。

最後になりますが、今派遣においてご尽力いただきました皆様方、ご支援・ご協力頂きました皆様方に、この場を借りて深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

事務局からの報告

一 平成29年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」の斎行

(一) 7月8日(土)、靖國神社において、当協議会が参加団体と共に挙行した平成29年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」は、梅雨明けを思わせる真夏の暑さのなか、多くの会員の皆様のご支援、ご協力を得て無事終了することができました。大勢の皆様のご参列に心から感謝申し上げます。

また、今回も昨年同様全国津々浦々の多くの会員の皆様から、在宅参拝のご意向に添えて、玉串料及びご寄付をお届け頂きました。戦没者慰霊に寄せられる皆様のお心を強く感じました。ご芳志誠に有難う御座いました。

当日は、坂明夫靖國神社権宮司、志摩篤偕行社社長、齋藤隆水交會理事長、藤縄祐爾隊友會會長、外菌健一郎つばさ會會長、寺島泰三英靈にこたえる會會長はじめ多くの来賓に御参加頂き、盛会裡に式典及び直会を実施することが出来ました。自衛隊からは統合・陸海・空各幕僚長代理にもご参列頂きました。

式典参列者は169名、直会参加者は126名、在宅参拝者は74名とほぼ例

年同様、多くの方のご参加を頂きました。

式典では、今年度も、世田谷コールエーゼ合唱団にご奉仕・ご協力を頂きました。

また、宇都隆史参議院議員、佐藤正久参議院議員、水落敏栄参議院議員、山谷えり子参議院議員から慰霊電報を賜りました。

直会は、靖國會館二階九段・玉垣・田安の間において、終始和やかな雰囲気の中、戦没者の慰霊顕彰に思いを致しながら寛いでいただきました。

なお平成30年度の大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭は、平成30年7月7日(土)に行う予定です。

多くの皆様のご参加を頂きますよう、お願い申し上げます。

合同慰霊祭主催団体

・公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

(以下五十首順)

- ・公益財団法人 海原会
- ・英靈にこたえる会
- ・英霊の志を継承する会
- ・エラブカ東京都人会
- ・公益財団法人 偕行社
- ・鹿児島偕行会
- ・神奈川県偕行会

・旧戦友連

・熊本偕行会

・熊本歩兵第225聯隊戦友会 (永代会員)

・群馬偕行会

・NPO法人 国民保護協力会

・埼玉偕行会

・佐賀県偕行会

・NPO法人 JYMA日本青年遺骨収集団

・震洋会 (永代会員)

・公益財団法人 水交会

・全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑奉賛会 (永代会員)

・全国近歩一会 (永代会員)

・全国甲飛会 (永代会員)

・全国ソロモン会

・全国メレロン会

・一般社団法人 全ビルマ会

・ソ連抑留戦友・遺族会東京ヤゴダ会 (永代会員)

・公益財団法人 太平洋戦争戦没者慰霊協会

・公益社団法人 隊友会

・筑後地区偕行会

・公益財団法人 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会

・航空自衛隊退職者団体つばさ会

・一般社団法人 東京郷友連盟

・東部ニューギニア戦友遺族会

・特攻殉国の碑保存会 (永代会員)

・公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

・豊橋歩兵第18聯隊戦友会 (永代会員)

・一般社団法人 日本郷友連盟

・ネービー21

・ハワイ明治会

・姫路偕行会

・福井県偕行会

・福岡県偕行会

・宮崎県偕行会

・山口県偕行会

・予科練雄飛会

・陸士第53期生会 (永代会員)

・陸士第57期同期生会 (永代会員)

二 業務・会計監査の実施

当協議会は、4月27日事務局において、平成28年度業務・会計監査を受けました。監査の結果、事業は適正に行われており、また、経理について異常は認められませんでした。

○ 監査人

・阿部 軍喜 (公認会計士)

・藤原 博

三 平成29年第一回通常理事会及び定時評議員会の開催

(一) 5月10日(水)、当協議会会議室において本年度第一回理事会を開催しました。

本会議では、事務局から提出された議案について熱心な討議が交わされました。その結果、事務局案はそれぞれ原案通り承認されました。

○ 議案

- ・平成28年度事業報告
- ・平成28年度決算報告
- ・平成29年度定時評議員会の開催
- ・指定法人の平成29年度事業計画(報告)

○ 出席者

・理事11名中11名及び監事1名が出席
 (二) 5月25日(木)靖国会館玉垣の間において、本年度定時評議員会を開催しました。本会議では、事務局から提出された議案について熱心な討議が交わされました。その結果、事務局案はいずれも原案通り承認されました。

○ 議案

- ・第一、第二号議案 理事会に同じ
- ・評議員の選任
- ・理事の選任
- ・指定法人の平成29年度事業計画(報告)

○ 出席者

・評議員11名中10名、他に柚木理事長、圓藤専務理事、岩田常務理事が出席
 ・議長・新井光雄評議員

四 海外戦没者遺骨収集派遣参加希望者の募集

戦没者遺骨収集事業については、平成28年3月に新たな法律が制定され、国の責務として遺骨収集事業が行われることとなり、この業務を適正かつ確実に行うことができる者として、「(一社)日本戦没者遺骨収集推進協会」(以下「推進協」と略記)が指定されました。

当協議会は、推進協の設立当初から事業に参画し、新たな体制での戦没者遺骨収集に、これまで以上に積極的役割を果たすべく、心を新たにしております。

収集団の派遣は当面、これまでの厚生労働省実施の要領を踏襲して、各派遣の都度、推進協の下に各登録団体が要員を差し出して派遣団を結成し現地に赴くという形になり、当協議会もその登録団体の一員となっております。

従って、当協議会参加団体の多くの会員の皆様は、従来の硫黄島派遣と同じく、当協議会を通じて派遣団にご参加いただく形になります。

当協議会としては、新しい体制の下、従来の硫黄島派遣に加えて、広く海外各地の遺骨収集派遣についても、当協議会参加諸団体の会員の皆様のご参加の機会を作るべく、海外派遣参加希望者を募って事前に希望者を名簿に登録しておき、今後の推進協の派遣計画策定と派遣要員選定に前向きに対応したいと考えております。

大東亜戦争に戦没され、遠くアジアの山野に眠られるご遺骨の故国への帰還を果たすため、海外遺骨収集派遣参加希望に心ある皆様の積極的ご応募をお願いいたします。ご応募の方は、所属の団体事務局にお届出下さい。

所属団体事務局からは、希望者を纏めた登録名簿を当協議会にご通知いただく手筈となります。名簿纏めの第1次締切りを本年10月末と予定しますので、ご協力をお願いします。

なお、この希望者登録の細部につきましては、各所属の団体事務局にお問い合わせ下さい。

五 慰霊祭等への参加状況

1 4月2日(日)、靖国神社において第6回軍馬・軍犬・軍鳩合同慰霊祭が行われ圓藤理事が参加しました。
 2 5月29日(月)千鳥ヶ淵戦没者墓苑に於いて平成29年度拝式が行われ、圓藤理事外1名が参加しました。

残暑お見舞い
 申し上げます

公益財団法人 偕行社

- 会長 志摩 篤
- 理事長 富澤 暉
- 副理事長 塩田 章
- 副理事長 深山 明敏
- 副理事長 白石 一郎
- 副理事長 大越 兼行
- 専務理事 小柳 毫向
- 事務局長 若木 利博

公益財団法人 水交会

- 会長 藤田 幸生
- 副会長 古庄 幸一
- 理事長 齋藤 隆
- 副理事長 加藤 保
- 専務理事 赤星 慶治
- 事務局長 本多 宏隆

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

- 会長 杉山 蕃
- 理事長 藤田 幸生
- 副理事長 岩崎 茂
- 専務理事 衣笠 陽雄
- 事務局長 石井 光政

3 6月23日(火)、靖國神社において殉國沖繩学徒顕彰七拾年祭が行われ、
圓藤理事が参加しました。

平成29年度合同慰霊祭

参拝者及び寄付者名簿

秋上眞一 阿部軍喜 新井光雄
飯塚照子 池上均 池田英司
池田康博 石井光政 石川不二天
石橋聰 和泉永一 板垣裕
伊藤優一郎 岩崎生之助 岩田司朗
植木美知男 上杉公仁 上杉直恵
上野保則 上原喜光 梅木一美
宇都隆史(代理) 衛藤晟一(代理)
圓藤春喜 及川昌彦 大浦誠哉
大久保浩 大澤正幸 大徳園井
大徳孝子 大森陽美 緒方威
緒方繁代 小田村四郎 小畑朝宣
角館満弘 梶原義弘 金子敬志
柄沢健史 苅谷政太郎 川田眞佐子
菊地正一 菊池孝 菊池正通
菊地英宏 北嶋颯太 木下好記
黒川一夫 清水剛夫 熊谷猛
桑木悦子 古賀英松 小島健二
後藤由美子 小長谷文晴 小林武一
齋藤隆 齋藤文彦 齋藤信
酒井睦美 佐久田昌昭 佐藤みな子
塩田昌司 志摩篤 島村宜伸
清水昭俊 清水悟 白戸将吾

杉澤敬子 杉澤英雄 杉山蕃
鈴木周一 鈴木孝子 鈴木千春
住田陸快 瀬尾広大 瀬尾昌平
関口幹久 高崎啓一郎 高橋静
宅野成人郎 武田功 武田正徳
竹本佳徳 多田亜彩美 田中晃
田中みずき 田村奈央 千明八十次
辻 外文 寺澤廣一 寺島泰三
寺村誠士 富樫利男 戸次健三
富田定幸 内藤壽美子 中川法宏
中川玲奈 中西真紀子 永野美沙子
長峯精一郎 中村臺造 仲森澄
奈良保男 西尾孝俊 西島喜紹
西島みつ 二瓶恵子 野口清秀
野口健 野澤和弘 野中正一
橋本孝一 平野醇 深野眞樹
福井正明 藤田幸生 藤縄祐爾
藤沼則夫 外園健一朗 細川かおる
堀江正夫 堀田和夫 本多宏隆
前川渚 牧内達哉 正本禎亮
松本幹 松元光恵 三原醇也
宮内明乃 宮澤作太郎 宮本良臣
三好清子 森田茂生 森本浩吉
森本益夫 柳下進 山口章
山口敬之 山口美朝 山崎文夫
山下輝男 山本洋 柚木文夫
山谷えり子(代理) 横瀬富一
吉岡秀之 吉田久哉 吉野信一
若木利博 渡邊榮樹 渡邊秀光
渡部浩史

世田谷コール・エーデ合唱団14名
(以上合計169名)

平成29年度合同慰霊祭
在宅参拝者及び寄付者名簿

阿部敏行 安藤義雄 飯島勇二
井潟昭二 石塚隆 石原浩一
市川雄一 井上敏明 井本尚宏
宇井忠一 上田全喜 宇佐美寛
卯月修吾 海老原富美枝
大石廣 大徳利武 荻原健一
奥土居康行 奥山雄三 小田原健児
加藤佳夫 上村貞藏 川口良夫
川田久四郎 菅野幸治 衣笠陽雄
工藤重民 熊代将起 河野一欣
小須田朝安 此元志津範 小林博行
齋須重一 作左部貢 澤田壽朗
清水典郎 新郷勝亮 菅原道之
杉原清之 鈴木光夫 高村克復
武田健策 多田野弘 田中正和
谷垣尚 谷辺勝啓 田村祐茂
津田保昭 永井一成 長田務
新垣清松 西嶋正幹 橋本光彦
島間成允 花村龍男 早瀬登
早田亮彦 原田義治 東田政尋
樋口太 藤原博 布施木昭
二場健児 星野登志子 前田暢彦
真方侃 牧勝美 三浦誠哉
三春仁 八木啓太 山口淨秀

公益社団法人 隊友会

会長 藤縄 祐爾
理事長 先崎 一
常務理事 増田 好平
常務理事 吉川 榮治
常務理事 外園 健一朗
常務執行役 久納 雄二
事務局長 植木 美知男

航空自衛隊退職者団体

つばさ会

会長 外園 健一朗
副会長 岩崎 茂
副会長 溝口 博伸
副会長 戸田 眞一郎
副会長 片山 隆仁
副会長 鹿股 龍一
専務理事 吉岡 秀之

一般社団法人 日本郷友連盟

会長 寺島 泰三
副会長 森 勉
専務理事 新井 光雄
常務理事 勝木 俊知
事務局長 富田 稔

吉川 洋利 吉田 治正 若月 良介
(以上74名)

新入会員 (敬称略)
(平成29年3月1日～7月31日)

【賛助会員】
飯塚 照子 福井 正明

飯田正能様は去る4月19日
急逝されました。
飯田様は、当協議会の広報
誌「慰霊」の創刊時から編集
に携わられ、該博な知識を駆
使して内容の充実に寄与され
るとともに、慰霊思想の作興、
日本の歴史・伝統の継承に貢
献されました。
ここに謹んで飯田様の御冥
福をお祈り申し上げます。
公益財団法人
大東亜戦争全戦没者
慰霊団体協議会

機関紙「慰霊」の合版号発行

機関紙「慰霊」は、例年、4
月、7月、10月、1月に発行し
ておりますが、諸般の事情から、
本年度も、7月号、10月号の合
版号として9月発行と致しまし
た。ご了承下さいませようお願
い致します。

寄付金の税額控除に係る

領収書等の送付について
当協議会は、租税特別措置法
に基づく税額控除対象法人に認
定されております。
従来、5000円以上の年会
費・寄附金を頂いている方に領
収書及び証明書(写し)を送付
しておりますが、本年度も同様
の処置をさせていただきます。
なお、本送付は、12月中の発送
を予定しておりますので、ご了
承下さい。

また、確定申告にあたりこの
領収書及び証明書(写し)をご
希望の方は、ご遠慮なく電話等
で事務局までお申し出下さい。

当協議会会員ご入会のご案内

当協議会におきましては、慰霊
事業の永続を図るため、多くの方々
の会員ご加入をお待ちしています。
皆様のご協力をお願い致します。
会員の区分と年会費は次のとお
りです。

- 一 賛助会員 (本会の趣旨に賛同する個人)
年会費 三〇〇〇円
- 二 賛助特別会員 (特別御芳志の賛助会員)
年会費 五〇〇〇円
- 三 正会員 (本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体)
年会費 一〇〇〇〇円
- 四 特別会員 (本会の趣旨に賛同する法人・団体)
年会費 一口 一〇〇〇〇円
(一口以上)

会費納入のお願い

平成29年度会費未納の方は、
速やかにお払い込み下さいませ
ようお願い申し上げます。
なお、本年度会費未納の方に
は振込用紙を同封しております。

残暑お見舞い

申し上げます

公益材団法人

大東亜戦争全戦没者
慰霊団体協議会

- 会長 島村 宜伸
- 理事長 柚木 文夫
- 専務理事 圓藤 春喜
- 事務局長 岩田 司朗

- 株式会社 SNA
- 株式会社 キャリア
- コンサルティング
- 軍学堂
- 医療法人社団 伍光会
- 株式会社 再生日本21
- 株式会社 青林堂
- 特定非営利法人 孫子経営塾
- 同台経済懇話会
- 株式会社 防衛システム研究所
- 株式会社 リエイト